

ひら お じゅう さん づか
平尾十三塚稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 1999. 10. 20

稲城市平尾と川崎市麻生区五力田の境界付近に、平尾十三塚があります。この塚は古くから知られていた塚で、江戸時代の地誌『江戸名所図会』や『新編武蔵風土記稿』、さらに平尾村の江戸時代の古文書や絵図にも記録がみられます。十三塚は全国的に分布していますが、稲城周辺では類例が少なく、大変貴重な塚といえます。

13基の塚は、川崎市との境界線上の低い尾根に東西方向に一直線に並んで築かれています。13基のなかでは中央の塚（7号塚）が、各塚に比較して一つだけ高く大型で、典型的な十三塚の形をしています。この7号塚を挟んだ両側の12基の塚は一律に小振りです。塚の大きさは、高さ25cmから150cmで、平均すると約70cm前後の高さになります。

昭和34年と43年に東京都教育委員会により発掘調査が行われました。43年の調査では中央の大型塚（7号塚）を発掘しましたが、

その時の様子では、塚の封土はすべて黒色有機質土壌で、内部からは遺物は一つも見られず、塚築造の目的や時期については明らかにすることはできませんでした。しかし十三塚全体の実測調査により、中央の塚が大型であり、それを挟んで両側に12基が並ぶという形は明確になりました。

柳田国男・堀一郎共著の『十三塚考』（昭和23年）によると、全国に223例の十三塚が分布していることがわかります。しかし最近の大都市圏の開発によってほとんどは破壊されたり消滅してしまっています。市内でも平尾十三塚のほかに、大丸の権現山（南武線南多摩駅の西側、医王寺付近）にあったことが『新編武蔵風土記稿』に見られ、塚の高さは各2・3尺（約66cm～99cm）程度であったことが記録されていますが、現在は削平されてしまっており残っていません。つまり現存



平尾十三塚 東京都埋蔵文化財調査センター提供

するものとしては平尾十三塚が市内唯一の例であり、また都内全域をみても、現存するものは平尾十三塚のみといわれ、その点でも重要な史跡といえます。

平尾に残る貞享3年（1686）の古文書（馬場家文書No.4）は、平尾村と片平・古沢村との間で起きた入会地をめぐる争論に対する裁許状で、昔から存在していた2つの塚（十三塚と入定塚）を村の境界線と定めることが記されています。2つの塚を境界線として利用したわけですが、これらの塚が、貞享3年以前から存在していたことがこの資料から明らかになっています。また、この資料では十三塚の名称を「供養塚」と表現している点も注目されます。

十三塚の性格・築造時期については、調査や関係資料によっても明らかではありませんが、民俗学者の柳田国男は、民居鎮護のために境界線上に築いたもので、修験道と関係し中世後期に築造されたものと述べています。その後の諸氏の研究により、(1)死者の供養 (2)境界の指標 (3)修法壇などの説があり、研究が進められていますが、発掘調査によっても遺物の出土はなく、その性格を明らかにすることは難しいのが現状です。

段木一行氏は『稲城市史』のなかで、現在の境界線は近世以降に設定されたものであり、これを中世後期まで遡らせることには疑問が残ること、平尾十三塚の場合は境界線上に築かれたものではないことを述べています。つまり平尾十三塚の場合は、築造後に境界線として利用されたものであり、境界線を意図して築造したものではないといえます。むしろ貞享3年の裁許状で記されている「供養塚」という考えが妥当といえます。また築造時期については、平尾十三塚の西隣にある入定塚が天文5年（1536）築造であり、位置的にもほぼ接続するような形で築かれていることから、ほぼ同時期に築かれたものと考えられます。

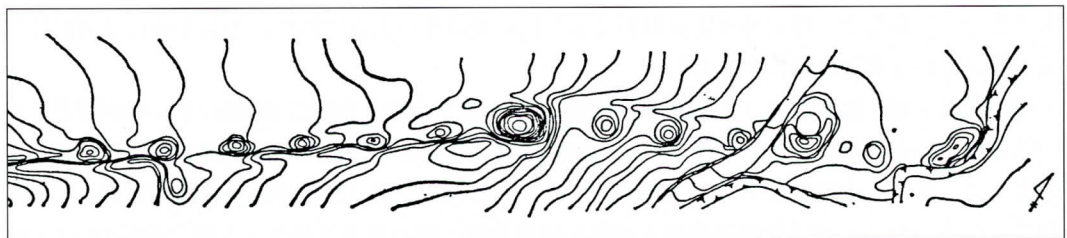
引用参考文献、『稲城市史上巻』『稲城町誌』『十三塚考』『十三塚－実測調査・考察編－』



平尾十三塚の位置

塚	測量高	地面高	実際高
	cm	cm	cm
1号塚	288	163	125
2号塚	350	225	125
3号塚	288	225	63
4号塚	262	175	87
5号塚	238	197	41
6号塚	212	175	37
7号塚	225	75	150
8号塚	100	25	75
9号塚	75	12	63
10号塚	32	0	32
11号塚	25	-50	75
12号塚	-25	-50	25
13号塚	-13	-75	62

平尾十三塚の計測値一覧



平尾十三塚の平面実測図（平尾遺跡調査会原図）